
孤島の樂園にて（結） 神崎小百合視点

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤島の樂園にて（結） 神崎小百合視点

【Nコード】

N0733J

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

美砂、小百合、陽向、亮の四人は、連休を利用して美砂の父が経営する無人島のホテルに遊びに来た。楽しいはずの樂園での休日、突然起こった竜巻と悪天候で一変する。グループ小説企画です。「起承転結」に分け、それぞれ四人の主人公視点でえがきます。

（前書き）

グループ小説第二十五弾「サバイバル企画」です。「砂漠の薔薇」で検索すると、他の作者さんの作品が読めます！「起承転結」の「起」加賀上美砂視点は春野天使、「承」九瀬亮視点は工藤流優空さん、「転」菱河陽向視点は雨宮だりあさん、が書かれました。

空が白み始めた。

水平線の向こうから日が昇り始めている。私達はこんな状況に置かれてるのに、太陽は何事もなかったかのように静かに海から上り、光りの矢を放っている。でも、その光景はあまりにも綺麗で、一瞬、今の状況のことなんか忘れて朝日に見入っていた。

「綺麗だな」

突然、私の横で声がした。視線を移すと、そこには九瀬君^{くせ}が立っていた。朝日を浴びた九瀬君の黒髪がキラキラして、光りの中の彼の端正な横顔は、朝日以上に綺麗だった。

「ほんとに。あんなスゴイ嵐が襲ってきたなんて信じらんない」

私は九瀬君の横顔にみとれながら、ニツコリと笑った。とたんに彼は顔をしかめる。私がいることに今初めて気付いたみたい……さっきのは独り言で、別に私に言った訳ではないらしい。九瀬君が私に会いに来てくれた、なんて妄想しても虚しいだけかも。彼の後を追いかけても、いつも嫌な顔して逃げられるだけ。

分かっている。九瀬君は私みたいなタイプが苦手だったこと。私だって馬鹿じゃない。でも、どうしても九瀬君の前では、可愛い女の子を演じてしまう。美砂^{みさ}のように大人っぽくクールになんて出来ないから。

それでも私は九瀬君が好き。彼を諦めることは出来ない。

「美砂^{ひなた}と陽向は？」

彼はサラリと話題を変えてきた。

「さっきまで近くにいたけど、二人ともシエルターに戻ったみたい」「ふーん、腹ごしらえしたら、のろしをあげてみるか。けど、風もおさまってきたし、そろそろ救助のヘリでもやってくるかもな。一日以上、連絡不通ならおかしいと思うだろうし」

九瀬君は冷静に言った。昨日は島の状況を見て、みんなパニック

になったけど、考えてみるとじつと待っていれば、誰かが島の様子を見に来るはずだ。もうすぐ救助が来るに違いない。早く、家に帰りたい。でも……四人だけの無人島での生活っていうのも、ドラマチックでワクワクする。もし、九瀬君と私、二人だけなら、映画の世界みたいにロマンチックなのに。私は乙女チックな想像を膨らませたりするが、九瀬君はそんな私を置いてサッサと戻ろうとしている。

「あつ、待って！ 九瀬くん！」

九瀬君が毛嫌いする甘ったるい声を出して、私は彼を追いかける。彼は振り向きもせず、足を速めて歩いて行くが、ふと足を止めた。

「待ってよ、九瀬くん！」

立ち止まった彼の元に私は走って行く。九瀬君は何か考えているように、じつと足元を見つめていた。

「どうかしたの、小百合？」

缶コーヒーを手に持ったまま、美砂は私の顔を見る。

「うつん、別に……」

少し離れた場所に座り、陽向君と缶コーヒーを飲んでいる九瀬君に、私は視線を送る。彼は私の視線に気付いて、チラリと目を向けた。

「なんとも、ない？」

私は探るような目で美砂を見た。

「何が？」

「コーヒー……」

「ああ、生温くてちよつとまずいかなあ。でも、貴重な食料だもの。冷えてなくても文句は言えないし」

美砂はクスツと笑うと、残りのコーヒーを飲み干した。

おかしい……確かにあれを入れたのに。側を離れて行く美砂の背

中を見つめながら、私は首を傾げた。

もしかして……。

「お前って怖いな」

入れ替わりに近づいて来た九瀬君が、私の耳元で囁いた。

「ウソだったの!？」

九瀬君は目を丸くすると、肩をすくめる。

「当たり前だろ。まさか、本気にして実行に移すとは思わなかった」
私は唇をかんだ。自分自身の浅はかさと空恐ろしさを、嫌と言うほど実感する。

さつき海岸で、九瀬君はそこに咲いている小さな花をじっと見つめていた。

「可愛い花ね」

無邪気に私が話し掛けると、九瀬君は大まじめな顔で声を落として言った。

「小さくて可憐に見えるだろ。けど、この花には毒があるんだぜ。すりつぶした葉っぱから出た汁は、一滴口にするだけで、人間一人簡単に死んでしまう」

「ウソ……」

私は息を吞んで、小さな花を見つめた。

「まさか、こんなとこに咲いてるとはな。もし仮に、ここに救助が来なかったら、飢え死にする前にこれで楽になるかな」

九瀬君はフツと笑うと、私を一瞥して歩いて行った。

私は九瀬君の言ったことを、簡単に信じてしまった。そして、その場から動けなくなった。

美砂はお嬢様で、何でも欲しい物を手に入れている。全ては自分中心に動いていると思っっている。私のことを親友だと思いこんで、親しくしているけど、本当は私のことなどちつとも分かっていない。いつも、私は美砂の味方で美砂の言うことは何でも聞いてくれると

思っている。対等に付き合っていると思っっているけど、やっぱり上から目線で私のことを見てるんだから。

でも、それは仕方ない。私も両親も美砂に養われてるから。美砂達一家がいないと生きていけないから。

私はその場にしゃがみ込んで、じつと花に見入る。

美砂が九瀬君に気があることは知っている。隠していても態度で分かる。九瀬君が美砂に気がないとしても、美砂ならいずれ彼を手に入れてしまうかもしれない……。

そんなの許さない！ 彼は九瀬君だけは、美砂に渡したくない！
彼女さえいなければ！

気付いたら、私は花を手にしていた。そして、美砂の缶コーヒーに葉の汁を入れて……。

悔しくて涙が溢れてきた。完全に九瀬君に心を読まれ、試された。まんまと九瀬君の罠にかかった。

こんな状況になって、島にいたほとんどの人間は死んでしまったんだから、美砂一人死者に加わったとしても、たいしたことはないと思った。

私はどうかしている。危うく、殺人者になろうとしていたんだ。もし、美砂がいなくなっただとしても、九瀬君が私に振り向くはずはない。私の本性が彼にばれてしまったようなもの……。

「そろそろ外に出て、のろしでも上げに行こうよ！」

一息ついた陽向君が元気な声で言う。

「そうね、高台に行って待っていれば、そのうちヘリが迎えに来ると思うわ」

自分が殺されかけたことも知らず、美砂も明るく言う。本当に二人ともお嬢様とお坊ちゃまなんだから。

「小百合、行きましょう！」

美砂が私に笑顔を向ける。

「うん！」

心とは裏腹に、私もニコツと笑った。

島の高台からは、島全体が見渡せる。本当に島の施設は跡形もなく消え去ってしまった。私達四人が生きているのは、奇跡に違いない。

九瀬君と陽向君は、木ぎれに火をつけてのろしをたいている。私は岸壁の端に立って、海を眺めた。波はまだ高いけれど、もうフェリーにも乗れそうなくらい落ち着いてきた。真っ青な空とエメラルドグリーンの海は、島を訪れた時に戻っている。

「ひゃ、ここから下を覗くと足がすくむね」

美砂が私の斜め前に立って岸壁の下を覗いている。切り立った岸壁には、白い波が打ち付け、渦を巻いて砕け散っている。

「ホント、落ちちゃったら、命ないよね……」

ふと、私は美砂の背中を見る。私の直ぐ目の前で、美砂は無防備な背中を向けている。私が手を伸ばして、その背をポンと一押ししたら……。私はゴクリと唾を飲み込んだ。

「おっ、へりだ！　へりが来た！」

その時、空からプロペラの音がして、一機のへりが島に近づいて来た。

「オーイ！　ここだ！」

九瀬君と陽向君が、大声を上げてへりに手を振る。美砂も顔を上げ、声を上げながら手を振った。

私は伸ばしかけた二本の手をゆっくり下げると、空を見上げ声を限りにへりに向かって叫んだ。

私はやっぱり美砂を殺せない。まだ今は、彼女の支配下に置かれているから。まだ今は、純粹無垢な可愛い女の子を演じ続けなければならない……。

完

（後書き）

「結」が大分遅くなりましたが、急きよ春野天使が書かせてもらって完結させました…。間があいたので、ちよっとじつまが合っていないかもしれませんが…。放置し続けるのも気持ちが悪いので、独断で書きました。聖司さん、余裕が出来ましたらこれと違う「結」を書いて下さいね。

参加者の皆さん、どうもお疲れさまでした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0733j/>

孤島の楽園にて（結） 神崎小百合視点

2010年10月8日15時13分発行